感染殺人～バイオキリング～

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
感染殺人～バイオキリング～

【Ｎコード】
Ｎ３８５１Ｚ

【作者名】
流星群

【あらすじ】
これは人の命を助ける――そんな感動的で素晴らしい物語ではない。生まれながらにして殺人鬼の主人公が、殺人鬼共を？狩る（ハウンティング）？話。

【プロローグ　chapter1－1】（前書き）

《作者からの一言メモ》
新しく書き始めた小説です
電撃大賞用で、各話が８０~１３０ぐらいいくと思います（電撃大賞の上限と同じ枚数にするので）
ですから、賞に送る前に、感想、評価等をしてくれたら作者が大喜びします！
書き終わること前提なので、長い目で見てください

【プロローグ　chapter1－1】

「絶対にコロス！」

狼は一匹の兎（えもの）を狙っていた。

真夜中の路地裏は、空の色より更に闇（くら）い。ぽつりと立っている電柱の、心許ない明かりだけがそこら辺を照らしていた。汚物やらゴミやらが散乱し、より一層不気味にさせている。

そこを二つの影が通る。

息を切らし、ゴミに躓きながらも必死に走る兎。それを難なく追う、狼。

彼らはかれこれ一時間以上も走り続けていた。

人がいれば、狼はその場を撤退し、兎の命は助かっていただろう。けれど、夜中とあって、しかも路地裏では人の気配さえもない。

「コロスコロスコロス！！」

狼はもう何度目かの怨嗟を口にしながら、右手に握り締めていた黒光りする硬い物体――拳銃を兎に向け、引き金を引いた。

パンッ！！　と乾いた発砲音がし、ビルの外壁に大人の親指程度の小さな穴が空いた。

兎はヒイイイッ！　と叫び声を上げながら曲がり角を右に逸れる。

「いいぞいいぞ！　徹底的に追い詰めてやる……。コロシてやる！　ククククッ……ハハハハハハッ！！」

歯をむき出しにして高らかに笑い、銃刀法違反の日本で拳銃を持ち歩く姿は、まさに獲物を狩る狼（ハンター）のごときである。

こうして狩人は、拳銃で獲物を脅し、表通りに出られないように誘導していたのだ。

路地裏の、もっとも深い場所へと引きずり込むために。

闇の奥へと誘う獲物を、狩人は口元を不気味につり上げて、悠々と追いかけていた。

絶好の好機を伺うべくして、時を待つ。そして、その好機は、突然にして巡ってきた。

「ぜぇぜぇ……。はぁ……うっ、嘘だろ！！　何で！　どうして行き止まりなんだよ！！」

彼らが最終的に行き着いた所は、ビルの壁で囲まれた行き止まり。

薄汚れた壁に背を預けて獲物はずるずるとへたり込んだ。どうあがいても逃げられないと悟ったからだろう。狩人は、ゆっくりと獲物に近づいていく。

ビビビと、虫共が群がる電柱の下に、彼らの顔が曝される。

獲物はまだ若かった。齢一五、六ぐらいの少年。金髪に染まった髪が汗で頬に張り付き、顔は苦痛で歪んでいる。元は綺麗だったのだろう制服は汚れ、茶色がかっていた。

対して狩人の方はというと……彼も若かった。金髪の少年と同年代である。黒髪で眼鏡を掛け、どこか陰鬱そうな印象を受ける。けれど、彼は金髪少年とは違い、汗を一つもかいていない。出来損ないの笑みを浮かべ、余裕そうにしていた。

【プロローグ　chapter1－2】

呼吸がやっと整い、まともに話せるぐらいになって、金髪の少年は口を開く。

「霧戸（きりと）！　俺が何したって言うんだ！」

霧戸と呼ばれた黒髪眼鏡の少年は笑顔を消し、唇を噛みしめて怒りを露わにする。

「ダマれ！　僕は君をコロサなければ気が済まない！」

「ちょ、ちょっと。お前、本気で言ってるのか？」

じりっと背後の壁へ更に後退する金髪少年。身体は小刻みに震え、みっともない姿だが本人はまるっきり気にしていないらしい。

滑稽な姿の彼を見て、霧戸は笑みを浮かべるぐらいの余裕がまた生まれた。

「ホンキだ。君が僕に何をしてきたのか覚えてるよな？」

「だって、あれは！　お前をからかってただけで……！」

「ウルサい！」

思い出したくもない当時の出来事が鮮明に頭へと流れてくる。自分をあざ笑う彼らの声。殴り飛ばされた時の痛み。心に刻み込まれる屈辱の数々。それらがずっと霧戸を苛み、今の今まで消える事の

ない記憶(あざ)となっていた。

霧戸は奥歯をギリっと噛みしめる。忌々しい思い出をもかみ砕くぐらいに力強く。

「いいですか御堂様。御堂様はからかっていただけかとお思いになるかもしれませんが、僕は大変傷つきました。痛かったです。苦しかったです。涙が出ました。止めてください、と懇願したのに、でも御堂様は止めになりませんでしたよね？　僕が何を言っても」

過去の思い出を無理矢理記憶の奥底から引っ張り出し、霧戸はそれを告げる。

御堂と呼ばれた金髪少年は、霧戸の話を聞いて、はっとしていた。

「お前、その言葉遣い……」

「御堂様がこうしろと言いましたよね？」

「それは、悪ふざけが過ぎたというか……」

「悪ふざけなら何でも許されると思うんですか？」

「ごめん！　この通り謝るから、お願い！　許してくれ。殺さないでくれ！」

額をついて許しを請う御堂の姿に、霧戸の心は憎しみで溢れかえっていた。

「謝るから、許すしてくれ……？　フザけんな！　僕がどんな思い

でいたのか知りもないくせに！　今更謝ったって何もかも遅い！！」

激情のあまり、口調が戻っていた。でも、もうそんなことは気にしなくていい。どうでもいいのだ。霧戸はこれから、御堂にびくびく怯えなくても、痛い思いもしなくても、恥辱に耐えなくてもいいのだ。だって、彼をこの手で御堂を始末するのだから。

「もういい。これ以上話しても無駄だ」

不穏な空気を察したのか、電柱に群がっていた虫たちが一斉にどこかへ飛び去ってしまう。

空よりも、路地裏よりもなお濃い何かが、霧戸の体内から外へと放出される。

【プロローグ　chapter1－3】

それは一見して、靄のようだった。

霧状であるため、形は存在しない。ふわふわとと舞うその靄は、霧戸の身体を包み込むようにしていた。まるで、彼を身の安全から守るかのように。

川や湖、海や山に姿を見せるそれが、何故か路地裏から突如出現した。

これだけで奇妙だが、その出現した場所が、人間の身体からである。

加え、霧というのは、大気中の水蒸気が冷却され、小さな粒状の水滴となり、地面近くを浮かんでいる状態である。

けれど、今は、蒸し暑い真夏の夜。普通ではあり得ない話だ。

更におかしなことがある。

靄や霧は水蒸気、つまり水であるため、無色透明なはず。けれど、霧戸の周りに漂う靄は黒かったのだ。墨をまき散らしたかのように。

「何だ？　何をするつもりだ！」

「君には分からないよ。絶対。僕のことを知ろうともしなかったんだから」

御堂は霧戸に起きた異変に気づいていない。黒い靄は、一般人には見えないのだ。なのに、彼は不自然に怯えていた。何か、この世

ならざる気配でも感じ取ったのかもしれない。

霧戸は左腕を身体の横に水平に持ってくる。すると、今まで霧戸の周りに漂っていただけの靄が、彼の左手に集まっていく。そして、何かを形作っていく。

数秒の後に出来上がったのは、拳銃だった。右手と併せて二丁の拳銃が彼の手に収まっている。

「なっ！　お前、今何をした！」

御堂は驚愕を張り付かせた顔をしていた。

彼からしてみれば、突如拳銃が虚空から現れたように感じたに違いない。手品と同じような感覚である。たとえ、種をバラしたとしても、御堂には一生分からないだろう。

「君をコロスために準備をしただけだ」

憎しみを込めた瞳で、霧戸は御堂を睨み付ける。

両腕を持ち上げ、御堂に拳銃の標準を合わせ、引き金に指を伸ばす。

「止めてくれ！　お願いだ、頼む！」

彼は、自分がしてきたことに対して反省するどころか、最期の時まで自分の身の安全を守ろうとしていた。

我が身可愛さに出た行動に、霧戸の内部から怒りが泉のように沸き出す。

もう、これ以上生かすだけの価値は無いと判断する。

「楽にシネると思うなよ」

パンパンパンパンパンパンパン！　発砲音は途絶えることなく、何度も夜の静寂に響く。

【プロローグ　chapter1－4】

弾倉から全ての薬莢がはき出された頃、辺りは静けさを取り戻していた。

途端に、火薬と鉄の臭いが鼻につく。でも、決して不快ではない。むしろ、全部に片が付いたことがより現実として理解出来、清々しい気持ちにさえしてくれた。

気づくと持っていた二丁の拳銃は元の黒い靄となり、そして風に乗ってどこかへ飛んでいってしまった。

「こ、これで僕は……自由になるんだあああああアアア！」

興奮のあまり、霧戸は大声を出して飛び跳ねた。

いつまでもここでこうして喜びに浸っていたかったのだが、誰かに見つかったら元も子もない。折角彼らから解放されたのに、今度は刑務所でお世話になったら、今までしてきた全てが報われなくなる。

後ろ髪を引かれながら振り返ると、そこに――いた。

電柱の明かりが、その人物と乗っているバイクを照らす。

ソイツは、バイクのエンジンを止め、慣れた動作で下りた。

高い。ヘルメットの高さ分を引いても、霧戸より頭一つ分ぐらい上に顔があり、百七十センチは余裕で超えているだろう。中肉中背で、真夏だというのに、サラリーマンが着ているようなリクルートスーツをしっかりと着用していた。

ソイツはヘルメットを脱ぎ、素顔を曝らす。短髪黒髪の少年の顔が闇夜に浮き上がる。
もっと年がいっているのかと霧戸は思っていたのだが案外若かく、内心驚いていた。同い年ぐらいか、一つか二つ違いだろう。十八歳だと思われる。

彼は上着も脱ぎ始めた。白いシャツが露わになる。そのシャツは右の袖部分がなかった。代わりに、右腕には包帯がぐるぐると巻かれている。

「い、いつからそこにいた！　いつから見ていた！」

彼の不気味な雰囲気にあてられて、言葉を失っていた霧戸だったが、ようやく口に出来た。
自分の声が想像以上に震えている。声だけでなく、腕も足も、身体全体が恐怖で怯えていた。アイツは危険だと、警告音が頭の中でウルサイぐらいに訴えかけてくる。

「……」

少年は何も発しない。会話する余地すらないとばかりに。

前方しか行くべき道はない。だが、そこには少年が立ち塞がっている。とてもじゃないが、彼が易々と霧戸を逃がしてくれるとは思えなかった。殺人現場を見られてしまっては。

「おい！　何とか言えよ！　黙ってるだけじゃ何も分からないんだよ！」

全身の震えを抑えつつ叫ぶ。だが、当然のごとく少年は何も言わ

ない。

彼は一歩霧戸の方へと近づき、右腕を払った。生きているかのように、巻き付いてた包帯が右腕から解けていく。

「そ、それは……！！」

少年の右肩から――黒い靄が出ていた。

【プロローグ　chapter1－5】

「ひぃいいいいい！」

情けない声を上げて、霧戸はへたり込んだ。そのまま少年から下がっていく。でも悲しきかな、後ろにあるのは壁。行き止まりだった。逃げ場はとうにない。

横を向くと、血だらけの死体となった見知った顔の人間がいる。

「僕もコロされるのかよ！　イヤだイヤだイヤだあああああああああッ！！　死にたくない！　やっと！　やっと僕は束縛から解放されたんだ！　なのに、こんなのって……酷いよ……」

心からの叫びが、少年の耳に入っている様子はない。霧戸は知らぬ間に涙を流していた。

彼は無表情で霧戸を見下ろし、こちらに一歩ずつ近づいてくる。黒い靄は黒い右腕を形成し、いつのまにか右手には刀を携えていた。あれで呆気なくコロされるのだろうか。

「お願いだ、僕を見逃してくれよ……」

つい先程聞いたばかりの言葉を、掠れた声で霧戸は漏らしていた。御堂の言葉だ。相手にしたことは自分に返ってくるということなのか。人生の最後にこんな大切なことを学ぶなんて……もっと早くから知っておきたかった。

少年の冷たい眼差しと、刀が目と鼻の先に迫る。

「助けて……！！」

最後の悪あがきとばかりに、少年の細い両足を力強く掴む。けれど。

「あっ！」

いとも簡単に足で払われ、両手を離された。そして、風を切り裂くビュンッ――という音と共に、霧戸の首目掛けて刀が振り下ろされ、唐突に視界が反転。少年の足下がはっきりと見える。

この時、首を切られたのだと理解した。痛みさえもないぐらいに、ばっさりと。

少年はポケットから携帯を取り出し、霧戸を写真に納めた。

事が済んだのか、少年は霧戸から遠ざかり、バイクのある所まで向かう。地べたに蜷局を巻いていた包帯が生き物のようにシュルシュルッと動くと、彼の義手になる。

ヘルメットと上着を被り、彼はバイクに跨った。エンジンをふかして、一度も振り返る――霧戸を見る――ことなく、その場を立ち去る。

彼がいなくなって程なくして、霧戸の視界に白い霧がかかり始める。それと共に、急激に眠気に誘われる。これが死というものなのかもしれない。

後悔、無念、怒り、悲嘆といった運命の非常さを呪う言葉で心が溢れかえると思っていたが、意外にもそんな言葉は出ず、むしろ、安らかに眠れる気持ちよさに安堵していた。

薄れていく景色。もうほとんど何も見えていない。死がすぐ近くまで来ているのだと確信した。だから、最後に何か言いたかった。声に出すことは出来ないが、でも、ありったけの思いを胸に秘めて死のうと思った。

早くしないと死ぬという焦りで、これでいいか、と半ば投げ遣りで最期の言葉を締めくくった。

――さようなら。

【プロローグ　chapter1－6】

†

「依頼を遂行してきました」

鳳外人弟（ほうがいひとで）は【鳳外ビル】に帰還するとビルの最上階である二十階の部屋を目指した。

そこは豪勢にも、一フロアを丸ごと使った部屋で、壁が全面金色のガラス張りだった。ここからならば、美しい夜景を一望出来ることだろう。

金の羽毛で出来た絨毯が床に敷き詰められている。中央には、金箔をまぶした脚の短いテーブルが置かれ、そこに金の革のソファが左右に対峙する形で置いてある。

その向こう側では、金ピカの細長いデスクに肘を突いて座っている大柄の男がいた。

あの男がこのビルのオーナーにして最高責任者、鳳外絡繰（からくり）である。

絡繰の横には常に全身黒ずくめの男が二人控えている。男らは、絡繰に何かあった時、身を挺して彼の命を守る、護衛役。面識のある者でも絡繰は警戒を怠らない。たとえそれが、息子――人弟であってもだ。

カタギではない人間がこのビルに何人も雇われているが、仕事は絡繰を守るだけではない。このビルは名目上宿泊施設となっており、各部屋の掃除や雑事、更に、ビルに訪れてきた来客者の身の世話をする。簡単に言えば、ホテルのボーイに、荒仕事をプラスしたよう

なものだ。

「そうか……じゃあ、お前。依頼者を呼んでこい」

「はっ！！」

絡繰が、横に控えていた男に目で合図をすると、その男は返事をし、人弟に一礼して部屋を出て行った。

絡繰は吸いかけの金の煙草を金の灰皿でもみ消し、立ち上がる。彼は金のジャケットを羽織り、金のパンツを下に着ていた。どれもオーダーメイドで、合計うん千万はくだらない。加えて、うん百万はするだろうゴールドの腕時計を右腕に身につけていた。

全身黄金色の男が目前にやってくる。煙草の臭いが鼻についたが、嫌な顔一つしない。敬意を表すため、人弟は腰を落としてわざと自分の身長を下げた。

「どれ、証拠を見せてみろ、人弟」

「分かりました」

「ん……どうした？　何をじっと見ている？」

絡繰は疑問の眼差しを向けてくる。

「いえ、その……目の方は大丈夫でしょうか？　痛みや不快感、違和感はありませんか？」

絡繰の右目は金の眼帯で覆われていた。とある出来事が原因で彼の目は失明し、代わりに今は義眼を入れている。その出来事を作った張本人が人弟であった。

だから人弟はいつも彼の右目を気に掛けていたのだ。

【プロローグ　chapter1－7】

そんな人弟の心配をよそに、絡繰は露骨に表情を歪める。

「お前に心配される覚えはない。お前は医者か？」

「いえ、違います」

「なら、つまらんことをいちいち聞くな。己のことなど己が一番よく知ってる。ましてやお前は医者じゃない。それとも何か？　この目をお前は治してくれると、そう言うのだな？」

右目を指さして、絡繰は口角泡を飛ばす。ギラリと光る金歯が見えた。

「失礼しました。以後このような無粋な真似はしません」

十二分に反省した態度を取ると、絡繰の機嫌が収まる。そして、本来の話に戻る。

「依頼遂行の証拠をよこせ」

「分かりました。これです」

ポケットから携帯を取り出し、絡繰に写真を見せた。写真に映っているのは、頭部が切断された眼鏡の少年。一応、頭だけでなく身体の部位も撮っておいた。

「どれどれ……ふむ。おい、お前。依頼者が渡した、顔写真を渡せ」

「はっ！！」

絡繰の後ろで控えていた男が、腕に抱えていた分厚いファイルか

ら数枚の紙を取り出し、絡繰に手渡す。彼はその用紙を一通り眺めてから、もう一度携帯の方を見た。

「顔の照合は一致するが、後で依頼者に見て判断してもらう。んで、この少年の横に映っているもう一つの死体は何だ？」

「それは、その少年に殺された被害者です。すみません、僕がもっと早くに彼を見つけていれば殺されずに済んだのですが……」

「はぁ、糞餓鬼が！　死んだ後まで面倒くさいこと押しつけやがって。お前、処理班に、すぐ側の死体も片付けるよう連絡しろ」

お供の男が絡繰の命令を受け、すぐさま携帯で仲間と連絡を取り合っていた。

「ったく、大人しく死んでればいいものを余計なお世話してくれおって……！」

「申し訳ございません。僕が絡繰様のお手を煩わせてしまったようで」

「謝るな。謝るぐらいなら、お前が死体の処理をしてこい」

ギロリと片方の目で睨まれ、人弟は口を閉ざした。

重い雰囲気を払拭するように、コンコンと高い音が鳴る。お供の内の一人が、依頼者を連れて戻ってきたらしい。

途端に絡繰の態度が激変する。先程までの苛々が嘘のように治まり、笑顔を作っていた。わざわざ依頼者のためにと絡繰自らが出迎え、更に、自分の手で部屋の扉を開ける。

普段の彼なら自分から扉を開けようとはしない。そういうのは決まって部下にやらせていた。自分の手でやるのが煩わしいからだ。

でも、依頼者となると話は別である。彼は依頼者に対して丁重に

持てなすのだ。

「どうぞ、入ってきてください」

丁寧になっているのは態度だけではない。しゃべり方も恭しくなっていた。

【プロローグ　chapter1－8】

「ささっ、こちらへ」

満面の笑顔を振りまきながら、絡繰は依頼者の女性をソファに誘導する。

女性がソファに腰掛けるまで人弟はずっと立って待っていた。絡繰にたたき込まれた、依頼者に対する誠意というものだ。女性が座ってからソファにやっと腰を落とした。

「おくつろぎしているところ、急に呼び出したりして申し訳ございません」

絡繰は人弟の横に立ち、女性に対して頭を下げた。刈り上げた金髪の髪に驚いたのか、それとも、彼の丁寧さに恐れいったのかは知らないが、女性はいえいえと激しく両手を振る。

女性は、三十代後半の若い母親だった。名前は依頼前に聞かされており、戸入静科（といりしずか）と言う。長年着こなしているのか、スーツの至る所がよれよれになっている。長い黒髪を肩から垂らし、眼鏡を掛けている。髪を短くしたら、きっとあの少年の顔と重なるだろうと人弟は思った。

疲れが溜まっているのか、静科の顔には深い皺が刻まれていた。

金箔の机のある一点を見つめながら、彼女は口を開いた。

「大丈夫です。で、あの、本当に……したのでしょうか？」

小さな声で呟いたので、途中聞き取れなかったが、何となく想像

はついていた。だから、

「はい。ご要望通り、?狩り?ました」

絡繰のように表情を作ることは出来ないから、人弟は彼女を安心させるために声を和らげて答えた。

「狩る?」

「はい。こちらの世界の業界用語で、?狩る?というのはつまり――」

「あ……そういうこと。分かりましたわ」

最後まで人の話を聞かず、静科は遮った。

人弟が何を言わんとしているのか、気づいたのだろう。

?狩る?……つまり、裏の業界では当たり前の専門用語。ここで行われている対談は、決して表の世界のことではない。日に当たることのない、血生臭いことを取り扱っているのだ。これが、鳳外ビルの本来の姿。そして、人弟の職業であった。

「念のために証拠品をお持ちしました。ショッキングな画像かもしれませんから、心して見てください。また、気分が悪くなったらいつでも言ってください。医者をお呼びする準備は出来ております」

人弟が携帯を手渡すと、恐る恐るといった感じで静科は受け取る。一度、深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、液晶画面に映った『証拠』を確認した。瞬間、ショックが大きかったのか、携帯をソファの上に落とす。

「大丈夫ですかッ!?」

人弟の声に静科は我に返り、慌てて携帯を拾い上げ、突き付けてきた。

「す、すみません。落としてしまって。壊れてないですよね！？」

「落ち着いてください。これぐらいじゃ壊れませんよ。平気です。それよりも、大丈夫ですか？　具合は悪くないですか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3851z/

感染殺人～バイオキリング～

2011年12月17日22時56分発行